

収がいまだに全くみられなかったことを裏付けるものと考えられた。

質 問：佐藤 匡（口生理）

1. 骨組織の増殖に対して通電電流の方向によって促進あるいは抑制効果があるといわれているが、これとの関連はどうか。

2. 埋め込む金属のボディー部分では電流密度が小さく、ポスト部分ではこの密度が大きくなるので、ポスト部分に骨組織の電流による変化が現われると思われるがどうか。

質 問：甘利 英一（小歯）

チタン合金の組織親和性はどうか。

回 答：梅原 正年（口病理）

○佐藤先生の質問に対して

1. 臨床的に通電電流の方向による骨の吸収は正確に判別できないが、それと思われるものも予測される。

2. 御意見の通りと考え、分割インプラントではボディー部分にチタン合金を、ネック部分にバイオセラムまたは細いチタン合金にポーセレンをコーティングしたものを使用した。

回 答：鈴木 鍾美（口病理）

○甘利先生の質問に対して

今回使用したチタン合金はコバルトクロームチタン合金で、すでにコバルトクロームが非常によい生体組織反応を示すことが確認されている。今回のチタン合金の組織反応がよい結果を示していることから、チタン単独の反応もよい結果を示すことが想像される。

演題3 低位乳歯の ankylosis の組織学的検討、後続永久歯欠如例について

○武田 泰典，八幡 ちか子，鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

乳歯の低位をきたす原因には種々のものが考えられており、その一つとして後続永久歯の欠如も大きな因子となっている。また、低位乳歯は顎骨と癒着をきたすことが多く、咬合と歯槽骨の発育に大きな影響を与えるものと考えられる。一方、交換期の乳歯は後続永久歯の萌出に因る組織圧により歯根が吸収されると考えられている。勿論、乳歯根の吸収には後続永久歯に因る組織圧以外にも多くの因子が関与しているものと思われるが、多数の後続永久歯が先天的に欠如した症

例では残存乳歯の根吸収は軽度であるとする報告が多く乳歯根吸収における後続永久歯の果す役割は重要なものと思われる。多数の後続永久歯の先天的欠如例そのものはそれほど稀なものではないが、ここに紹介した演者らの症例では残存乳歯が著しく低位に位置し、また、後続永久歯が欠如しているにもかかわらず、乳歯根に著明な吸収と ankylosis がみられた。このような症例について抜去乳歯ならびに周囲骨組織との関連等について検索した報告は少ないために、その組織像を中心に供覧した。症例は18才の男子で、EDCB|CDEの残存がみられ、X線的に5432|2345の欠如が確認された。また、残存乳歯の歯根の吸収は顕著であるにもかかわらず、動揺はほとんどなかった。さらに、歯槽骨の発育は極めて悪かった。これらの残存乳歯を抜去し、非脱灰研磨標本として観察した。歯根象牙質の大部分は吸収されており、その部に歯槽骨が癒着していた。さらに骨象牙質癒着部近くの象牙質の象牙質細管の走行は不規則となり、偏光で複屈折を示していた。象牙質吸収面に破歯細胞は認められなかった。また乳歯の吸収はエナメルセメント境界より上方に及んでいたが、エナメル質の吸収は明らかではなかった。一方、歯髄は象牙質を吸収置換した骨組織中に多少とも残存する傾向にあった。

質 問：甘利 英一（小歯）

1. 破骨細胞、破歯細胞がみられなかったようだが、象牙質・エナメル質の吸収はどのような機序によるものか。

2. 咬合していない乳歯で歯根が存在し、さらに骨の形成がみられたが、どのような原因が考えられるか。

質 問：野坂 洋一郎（口解1）

骨芽細胞が存在していないが、骨の形成機序としてどのようなことが考えられるか。

回 答：武田 泰典（口病理）

○甘利先生の質問に対して

1. 硬組織の吸収には破骨細胞、破歯細胞が関与するものではないものがあり、後者と考えている。

2. 原因は全くわからない。

○野坂先生の質問に対して

骨と象牙質の間には細胞成分は全くみられなかった。

演題4 乳歯の外傷固定法の一考案

○野坂 久美子，佐々木 仁弘，守口 修